

色彩感情の経年的研究 (2) SD法による色彩イメージ

A Long-Term Study of Color Affection (2) Color Images measured by SD Method

大山 正 Tadasu Oyama
伊藤久美子 Kumiko Ito

日本大学文学研究科 Nihon University
常磐短期大学 Tokiwa Junior College

キーワード: 色彩感情, 色彩象徴, セマンティック・ディファレンシャル

keywords: color affection, color symbolism,
Semantic Differential

1. はじめに

色彩に対する感情やイメージを測定するためにセマンティック・ディファレンシャル法(SD法)が広く用いられている。本研究では色彩感情の経年的変化をSD法で調べて見る。筆者のひとりはい幸い40余年前(1962年実施、1963年発表)に、女子学生対象に色彩に対するSD法調査を実施したが(文献1)、それとほぼ同じ方法で1998年(2001年発表)にほぼ同色の色紙に対して男女大学生に行った調査(文献2)と比較する。色彩感情に経年的変化があるかを検討する。更に同年齢層の女子学生に1963年発表と全く同じ色紙を用いた調査も予定している。

2. 方法

調査対象は、各調査時点における大学生で、調査人数は、1963年発表は18または23名の女子学生、2001年発表は11名の男子学生と9名の女子学生。

使用色紙は1963年発表では当時の日本色彩研究所標準色紙16枚、2001年発表ではPCCSカード11枚。うち今回比較するのはほぼ色相・明度・彩度が対応する赤(v2)、黄(v8)、緑(v12)、青(v18)、紫(v22)、白(W)中灰(Gy-5.5)、黒(Bk)の8色。

それらのJIS色相・明度・彩度は次の通り。1963年発表分は専門家の視感測色、2001年発表分はPSSC解説書による標準値を示す。

(1963 発表分)	(2001 発表分)
赤 5R 4.0/14.0	v2 4R 4.5/14.0
黄 6Y 8.5/12.0	v8 5Y 8.0/13.0
緑 4.5G 5.0/8.0	v12 3G 5.5/11.0
青 1.5PB 4.0/9.0	v18 3PB 3.5/11.5
紫 7P 3.0/12.0	v22 7P 3.5/11.5
白 N 9.5	W N9.5
中灰 N 5.0	Gy-5.5 N5.5
黒 N1.9	Bk N 1.5

SD尺度は1963年35尺度、2001年は12尺度。と

もに7段階尺度である。今回比較するのは、両者に共通する次の10尺度である。良い—悪い、美しい—みにくい(汚い)、さわがしい(騒がしい)—静かな、動いている(動的)—とまっている(静的)、派手な—地味な、熱い(暖かい)—冷たい、軽い—重い、明るい—暗い、きんちようした(緊張した)—ゆるんだ、鋭い—鈍い。カッコ内は2001年発表分使用を示す。

3. 結果と考察

両研究で共通する8色に対する10尺度上のプロフィールを図に示す。また各色毎にプロフィール間のPearson相関係数(r)を算出し、図中に示す。相関係数は赤、青、紫、黒において.88以上であり、色彩イメージの経年的不変性を示したが、緑、白、中灰ではやや低く(.70~.79)、黄で最低であった(.54)。

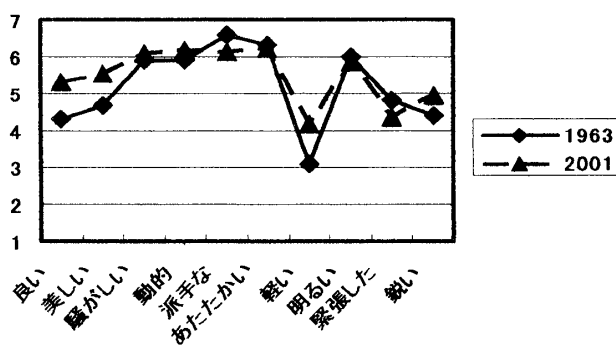
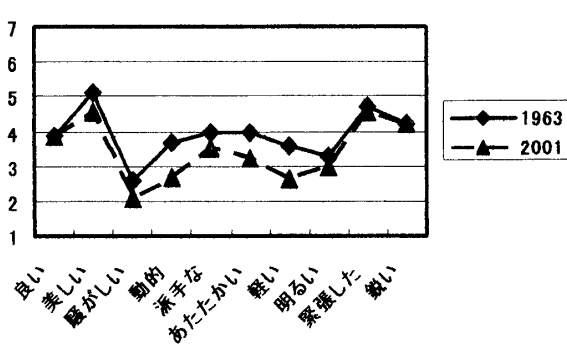
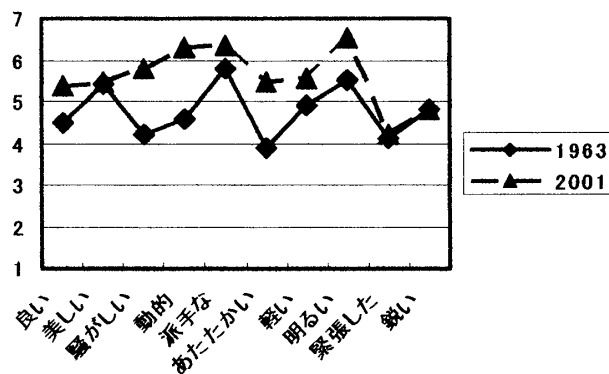
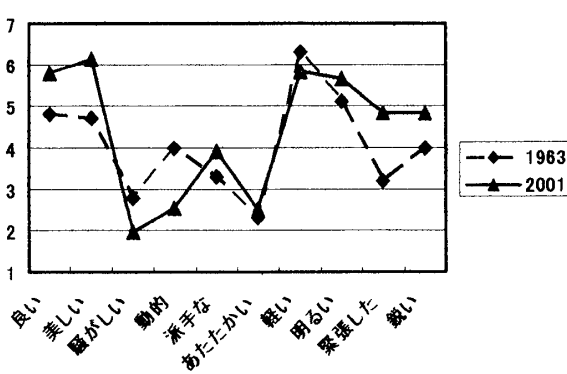
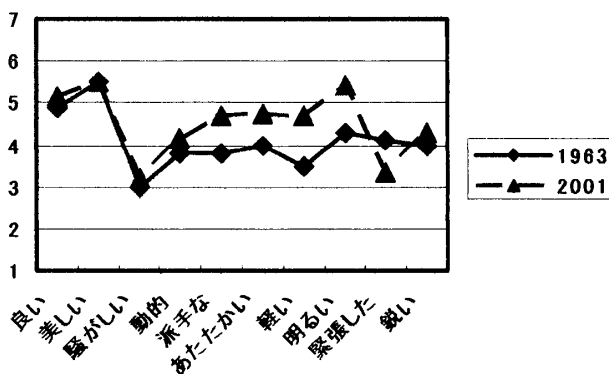
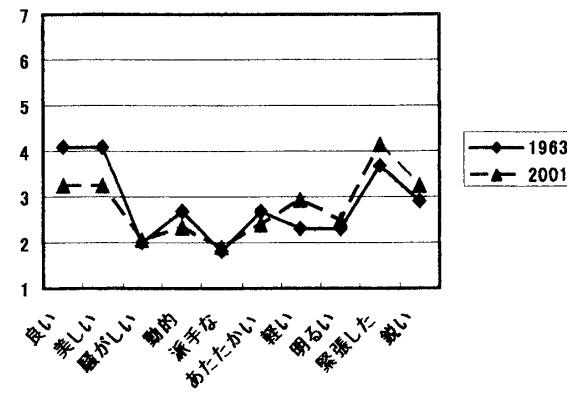
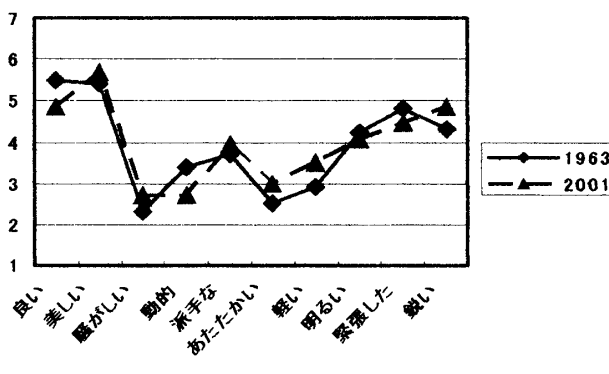
特に価値因子尺度(良い、美しい)で変化が大きく、赤、黄の暖色で上昇し、白、中灰、黒の無彩色で低下した。研究(1)の嗜好色の変化傾向と共通する。

また黄と緑においては、活動性と軽明性においても上昇傾向が認められた。今後の検討が必要である。

なお研究(1)で用いた象徴語に就いても1963年発表研究においてSD法によってそれらの与えるイメージが測定され、最近もそのうちの6語については男女学生に対して同様の測定がなされている(文献3)。共通の9尺度(色の場合の上記10尺度より熱い—冷たいを除く)を用いて経年比較をすると、非常によく似たプロフィールがえられた。相関係数は、怒り(.90)、永遠(.88)、幸福(.88)、孤独(.82)、不安(.74)、恐怖(.84)と高い値が得られ、時代を超えた安定性が認められた。この事はこれらの象徴語が色彩感情の経年的研究の手段として適当であることを示している。

参考文献

- 1) 大山 正・田中靖政・芳賀 純 1963 日米学生における色彩感情と色彩象徴 心理学研究, 34, 109—121.
- 2) 大山 正・日比野治雄・愈 靖萍・鎌田晶子 2001 2色配色の感情効果—単色の効果との比較 日本色彩学会誌 25 Supplement 98-99.
- 3) 大山 正・鎌田晶子 2004 形の象徴性の文化間比較 日本心理学会第68回大会発表論文集 596.

RED ($r=.88$)PURPLE ($r=.91$)YELLOW ($r=.54$)WHITE ($r=.77$)GREEN ($r=.70$)GRAY ($r=.79$)BLUE ($r=.90$)BLACK ($r=.92$)